脊髄硬膜外造影を用いて牽引による腰椎椎間板ヘルニアの整復検定

Epidurography in reduction of lumbar disc prolapse by traction/Gupta, R.C. et al.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **59**, 322-327, 1978.

【腰椎ヘルニア，硬膜外造影】

椎間板ヘルニアに対する牽引療法については，今世紀初めより種々言われてきているが，本論文は，牽引前後の脊髄硬膜外造影により，牽引療法の治療効果の高さを実証し，同時にこの造影法の利点について触れている．症例は14例で，いずれも7～10日の bed rest にて症状の軽快がなく，典型的な椎間板ヘルニアの症状を有し，かつそれと一致する明瞭な defect 像が牽引前の造影にて認められた症例である．これらに，27～36 kg の皮膚介達牽引を10～15日間実施した後，再度造影し，牽引前の像と比較し，defect の消退の有無と臨床症状の改善の程度から治療成績を許価している．defect が消失し，臨床症状が著明に改善したもの（Good）10例，defect が縮小し症状の改善がみられたもの（Fair）2例，どちらも良くならなかったもの（Poor）2例であった．うち9症例に対して1～2年の Follow up を行ない，いずれも日常生活に復帰し再発を見ていない．

（横浜市大　渡辺　仁美）

脊髄損傷後の無菌的間歇導尿：導尿期間中の細菌尿の動態

Bacteriuria during intermittent catheterization following spinal dord injury/Donovan, W.H. et al.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **59**, 351-357, 1978.

【無菌的間歇導尿，神経因性膀胱，脊髄損傷】

脊髄損傷後の神経因性膀胱に対して無菌的間歇導尿法は有効であるが，期間中の細菌尿の動態についての研究は非常に少ない．著者らは，専門家による導尿チームを作り，脊損センターに入院中の脊髄損傷患者60人に対して，1人当り平均13.5週間無菌的間歇導尿を行ない，細菌培養により細菌尿の動態を調査した．合計で25,780回の導尿を行なったが，細菌尿は178回であり，出現率は0.007で非常に低かった．60人のうち全期間を通して無菌であったものは23％で，細菌尿が1回のものが18％，2回以上が59％であった．E. coli と Klebsiella が最も多かった．抗生物質を投与中の細菌尿では Pseudomonas が多かった．無菌的間歇導尿を受傷後1カ月以内に開始した群と1カ月以後に開始した群の間には，導尿期間，細菌尿とも有意差はなかった．導尿開始後6週以後で，細菌尿出現率（細菌尿回数/導尿回数）は急上昇を示し，その時期を境にして患者の細菌に対する抵抗力の低下が示唆された．

（横浜市大　佐鹿　博信）

心筋硬塞後の ST 変化――多発性冠疾患および左心室瘤の発見のために

ST segment changes post-infarction: Predictive value for multivessel coronary disease and left ventricular aneurysm/Weiner, D.A. et al.: Circulation, **58**, 887-891, 1978.

【冠疾患，ST 変化，左心室瘤】

硬塞患者を運動負荷心電図における ST の変化によって4群に分け，全例に冠動脈撮影と左心室造影をしてそれらの関係を調べた．負荷後の ST 降下（ST↓），ST 上昇（ST↑）はいずれも 1 mm 以上変化があった場合を陽性とした．第1群（83名）：ST↓のみを示した．第2群（22名）：ST↑との他の誘導における ST↓．第3群（19名）：ST↑のみのもの．第4群（30名）：ST に変化がないもの．そこで，多発性冠疾患（70％以上の狭窄）を持っていたものは1群のうち63名（76％），2群の20名（91％），3群の4名（21％），4群の4名（13％）であった．また，左心室瘤を持っていたものは1群の26名（31％），2群の15名（68％），3群の15名（79％），4群の12名（40％）であった．この結果から，ST↓は ST↑を伴っても伴わなくても多発性冠疾患の存在を示し，ST↑単独または負荷テスト陰性は単発性冠疾患を示し，ST↑は ST↓を伴っても伴わなくても左心室瘤を示す可能性が大であるとい言える．

（七沢病院　中村　昭）

頸動脈内膜除去術後の脳内出血：高血圧症の合併によるものか

Intracerebral hemorrhage following carotid endarterectomy: A hypertensive complication?/Caplan, L.R. et al.: Stroke, **9**, 457-460, 1978.

【内膜除去術，脳内出血，高血圧】

頸動脈内膜除去術は虚血性脳血管障害の治療の一つとして，近時よく行われる治療法の一つになっている．手術中の脳虚血，心筋硬塞などが重大な合併症として知られているが，手術後ある期間（数時間～数日～数週）を経て当該頸動脈の末梢側に出血を起こすことがあり，著

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/09 23:18:43

者は手術そのものは順調に成功したにもかかわらず，18時間後および手術翌朝，脳出血により急死した2例を報告している．いずれも術前 TIA を繰返しており，高血圧を合併しているケースである．以前に報告された15例にも同様な症状がみとめられ，いずれも手術後良好な改善をみたにもかかわらず突然脳出血を起こしたものである．頸動脈血栓により虚血状態におかれ，動脈，毛細管などの透過性に変化をきたしているところへ，内膜除去により急激に血流量が増え，これに高血圧が加わって出血にいたると考えられるが，術後数日～数週も遅れをおいて出血するのがなぜであるかは説明がつかない．

（七沢病院　福井　圀彦）

小児期片麻痺後の鏡像運動

Mirror movements after childhood hemiparesis/Woods, B.T. et al.: Neurology, **28**, 1152-1158, 1978.

【鏡像運動，小児片麻痺】

鏡像運動は小児期には異常ではなく，早期の脳損傷に伴う場合は後年まで持続することがあるとされる．そこで，小児期に一側性脳病変を生じた50例（21例は1歳以前に発病）について，3種類の手指あるいは前腕の動作課題を施行して，鏡像運動の出現について研究した．対照として，学齢別に6群，計72名の健常小児について同様の検査を行った．鏡像運動は病変を早期に生じたもの程，より多く持続した．また，麻痺手よりも非麻痺手に，すなわち麻痺手で動作を遂行しようとするときに，より多く出現した．一方の手が完全麻痺であると，両手ともすべての鏡像運動は出現し難い傾向があった．両側性支配下にあると考えられるような動作では，より鏡像運動が出現し易かった．より早期の脳病変により，鏡像運動がより多く持続すこるとは，未成熟の神経系に対して損傷後に生じる広範囲の代償性の運動系再組織化の指標であるように思われる．　（東大　江藤　文夫）

成人の悪性視神経グリオーマ

Malignant optic gliomas in adults/Harper, C.G. et al.: Archi. Neurol., **35**(11), 731-735, 1978.

【視神経グリオーマ，視床下部，側頭葉，視神経交叉部】

視神経から発するグリオーマは成人では稀で，85～90％は20歳前に見られる．成人例では腫瘍は悪性化しやすく，生前診断は困難である．この報告では63歳女性，75歳男性，79歳女性の3例を記載している．この3例とも視力低下，視野欠損で初発し，視神経近傍とくに視床下部，側頭葉に連続的に浸潤し，視床下部症状としては高熱とか低ナトリウム血症，半球症状としては片麻痺を示すが，何れも症状発現後3カ月で死亡している．視神経は交叉部，視索で高度の浸潤をうけ腫脹しているが視神経の眼窩内の部分は正常であった．側頭葉内に浸潤性に拡がる腫瘍組織は腫瘍塊の大きな例では中心部の壊死と出血が認められた．次第に進行する視力障害で始まる病気は視神経炎，クラニオファリレジオーマ，脳下垂体腺腫，内頸動脈瘤などが他にも考えられるが，最初から両側性の視力障害で早い進行の勢が見られる時は，視神経グリオーマをまず考える必要がある．

（中央鉄道病院　土肥　一郎）

膝ヒンジ関節形成術患者における金属感受性

Metal sensitivity in patients with a hinge arthroplasty of the knee/Webley, M. et al.: Ann. rheum. dis., **37**, 373-375, 1978.

【人工関節，膝，金属感受性】

Walldius ないし Guepar の人工ヒンジ関節を膝に挿入した50症例（RA 39, OA 11）について，1～5年後に，コバルト，ニッケル，クロミウム，マンガン，シリコン，鉄，モリブデン，アクリルポリマー，セメントについてパッチテスト（72時間後判定）を行なった．対照は非挿入の RA, OA 併せて33例．陽性例は，コバルト15例，ニッケル5例，クロミウム4例，マンガン3例，セメント1例で，このうち8例はコバルトのみ陽性，他の8例は2つ以上の金属に陽性を示した．対照では9％がコバルトに陽性を示した．挿入例の陽性率32％は他の報告とほぼ同率である．陽性例と合併症（ルーズニング，無菌性分泌液10例）についてみると，ルーズニング1例，分泌液5例がテスト陽性であった．合併症のない33例中10例がテスト陽性であった．挿入後の年数と陽性率には関連はみられず，RA と OA 間の差もみられなかった．今回の調査では金属感受性とルーズニングとの間に相関は認められなかったが，マクロファージによる金属の呑食や，コバルトその他の金属に対する細胞免疫が持続する無菌性分泌に関与する点について推論した．

（中伊豆温泉病院　間　得之）

2026/10/09 23:18:43